第１章

武道の歴史とその精神　概説

魚住　孝至

は　じ　め　に

「武道」という用語は、江戸時代以前から使われていたが、「武士としての生きる道」、「武士道」といった意味であり、特に武術や武芸を指すものではなかった。今日使われている「武道」という概念は、大正後期（1918～25）に柔道・剣道・弓道の総称として使われ始めたものである。今日、武道に含まれる種目としては、1977年に設立された日本武道協議会を構成する連盟の、柔道・剣道・弓道・相撲・空手道・合気道・少林寺拳法・なぎなた・銃剣道の９種目を指すのが一般的である。それぞれ歴史も内容も異なり、成立や基盤とするものが日本でなかったものも含まれるが、競技性よりも「人格形成」としての目的を強調し、練習ではなく「稽古」、練習場ではなく「道場」と言い、また形の稽古や演武があり、礼法を重視し、段位制を取るなどの共通した特色があるので、日本の武道とされているのである。ここでは各連盟傘下で行われているこの９種目を「武道」と捉えることにする。近代以前の流派武術を伝承しているものは「古武道」と呼ばれている。

日本武道協議会が1987年に制定した『武道憲章』には、「かつて武道は、心技一如の教えに則り、礼を修め、技を磨き、身体を鍛え、心胆を錬る修業道・鍛錬道として洗練され発展してきた」「術から道へと発展した伝統文化である」と規定している。

武道は、大枠で捉えれば、日本において独自に展開した武術文化を基にして、近代になって、西欧的なスポーツに学びながらそれに対抗して、近代的に再編して成立した運動文化と言えるであろう。

伝統性と近代性の両面を持ち、そのいずれを強調するかで、武道のあり様も大きく変化してきた。では、今日の武道がどのように成立し、展開してきたのか、その歴史を、時代背景とともに簡単にたどっておきたい。

Ⅰ．武道の伝統

武術の起源は人類の発生とともに古いが、日本の武術は、外からの影響も受けながらも早くから独自なものであったようである。

３世紀の『魏志倭人伝』には、「木弓は下を短く、上を長くし」と記されており、中国・朝鮮とは異なる南方系の長弓であったようである。けれども日本の射法は、矢をつまむ原始的な方式ではなく、右親指の内側に弦をかけて引く、中国・朝鮮に共通する蒙古式である[注1]。日本の民族と同様、弓においても、南方系と大陸系が混合して日本独特のものとなったようである。また五穀豊穣を願う農耕儀礼としての相撲は弥生時代から見られ、『日本書記』にある野見宿禰（のみのすくね）と当麻蹶速（たいまのけはや）の力比べの伝説が相撲の起源と言われている。また銅剣・鉄剣は弥生時代に大陸から伝わり、古墳時代には馬に乗り剣

写真１．相撲節会で仕度をする相撲人の絵（『相撲の歴史』［講談社］より）

を身に着けた兵士の埴輪も見られる。飛鳥から奈良時代にかけ、律令体制下の兵士たちにどのような武術の訓練がなされていたのかよくわからないが、平安時代には弓の「蟇目」や「射礼」、「節会相撲」（図１参照）などが宮中の神事の儀礼として行われていた(注２)。

日本の武術が独自に展開するのは、10世紀ごろ武士が誕生してからである。武士は、律令体制の軍隊とは別の私的な武装集団をなし、弓馬を操り、武術を専門とする職能者であった。平安中期には反りと鎬を持つ片刃の日本刀が出来ており、独自の剣術技法が展開したはずであるが詳細は不明である。武士は、11世紀後半から中央でも台頭し、12世紀半ばには国家権力を左右する存在となり、末には鎌倉幕府を成立させている。武士は弓馬の術の訓練をしており、鎌倉時代には笠懸や犬追物などの騎射が盛んであった。小笠原家は、弓馬や礼式の故実を専門に伝承し、14世紀に入って室町時代には伝書も作られて、流派の先駆的な役割を果たしている。

１．流派武術の成立

今日につながる武道の原型が形成されたのは、15世紀後期から16世紀にかけて生まれた流派武術においてである。戦国時代に入って、各地で合戦が相続く中で、武術が専門分化し、弓術、剣術、柔術等においてそれぞれの専門的な技法とその教習法を工夫した天才的な人物が現われ、それぞれの流派を形成した。

15世紀後期、剣術では飯篠長威斎の天真正伝神道流、愛洲移香の陰流、念流を継いだ中条長英の中条流、柔術では堤宝山の小具足、弓術では日置弾正正次の日置流など、各武術の源流となる流派が現われている。16世紀になると、それらを受け継ぎ、剣術では塚原

卜伝の新当流、上泉伊勢守秀綱の新陰流、伊藤一刀斎の一刀流、柔術では竹内久盛の竹内腰廻　り、弓術では日置流から吉田流、道雪派、雪荷派など、さまざまな流派が展開している。

写真２．流派の絵目録（〔塚原〕卜伝末後流目録：寛永４年（1627）発給：国際武道大学蔵）

武術流派が成立した背景には、日本の文化伝統があった。古くから神道・仏教・修験道などで身心をかけた修行法が定着していた。室町時代には歌道や能楽、生け花、茶の湯などの芸道で、一芸に達すれば、他にも通じ真実にも触れ得るとして、一事専念を言う「道」の考え方が成立していた。芸道の中で「型」を中心にする教習法があり、目録の形態もあった。15世紀初期には、さまざまな道の一つとして「兵法」（剣術）が挙げられていたが、後期に入って明確な武術流派が形成されたのである。

武術流派の流祖は、神社や洞窟に参籠して極意を編み出したと言われ（飯篠、愛洲、塚原、竹内……）、また彼らは戦わずして相手を圧倒した（飯篠、塚原、上泉……）などという伝説も、勝負以上のものを志向した彼らの意識を示している。

16世紀後半の戦国後期になると、長槍の足軽による集団戦法が主になり、加えて鉄砲の伝来・普及によって、それまでの重装備の騎馬中心の戦いから軽装備で白兵戦となる比重が高まって、実戦的な弓術・槍術・剣術・小具足・組討などの武術を訓練しておく必要があった。16世紀末の天下統一期から江戸初頭までは、まだ合戦が起きる可能性があり、武将としての性格が強かった大名たちは競って有能な武芸者を招こうとした。中央権力も織田、豊臣、徳川と

三変する中で大名の興亡も激しく、流動的な社会の中で武者修行が盛んであった。この時代に流派は一気に増え、槍術、居合術、砲術などにおいても独立した流派が生まれている。

2．近世武術の展開

17世紀初頭、江戸幕府が成立し、大坂の陣（1615）以降、合戦はなくなったが、士農工商の身分社会の中で、「弓馬剣槍」が武士の表芸として修練されることになる。弓・馬は上級武士の嗜（たしな）みであったが、刀は全ての武士が常に身に着ける身分の象徴でもあったので、剣術を中心として流派武術が展開した。

剣術では、木刀による形稽古が中心で、柔術も受と取の形稽古であった。流派の中では、それぞれに教習法があり、免許を出して教えるやり方だったので、伝書が多く作られた。「天下泰平」となっても武士は、タテマエとしては絶えず戦う備えが求められていたので、実戦的に役立つ武術であるよりも、武士としての覚悟を養成することが主であった。

幕府は軍事的には各藩を厳しく監視し、大名に参勤交代をさせたが、260余りの藩は独立した体制であった。武術流派は統制されることはなく、藩にはそれぞれに各武術で幾つかの流派の兵法師範がおり、また江戸や諸国の城下町に町道場があったので、各武術で多くの流派が展開することになる。

江戸時代の流派は、幕末までの250年間に、ある研究者によれば剣術745流（内、異名同流は120流、以下同様）、槍術148流（26流）、柔術179流（12流）、弓術51流（10流）の他、兵学71流（17流）、馬術67流（6流）、砲術192流（19流）など、非常に多くの流派が展開

することになる（注3）。

（1）初期；流派の確立

徳川家康は、戦国武将として武芸好きであり、かつ征夷大将軍として武家の伝統を重んじたので、個々の武士の武芸の稽古を奨励した。3代将軍の家光は、合戦を知らない世代であったが、武芸の稽古に熱心であった。家光治世の17世紀半ばまでは、合戦を体験した世代がおり、尚武の風は強く、幕府や諸藩には兵法師範がいた。彼らは兵法師範に相応しい伝書、伝承の形態を整備しようとした。

この時代に柳生宗矩の『兵法家伝書』（1632）や宮本武蔵の『五輪書』（1645）等が書かれている。宗矩は、乱れたる世の「殺人刀」は、治まりたる世では「活人剣」にならなければならないとし、禅僧・沢庵の教えを取り入れ、剣術の究極は「無心」で遣うこととし、心法を強調した。宗矩は将軍家兵法師範として大きな権威を持ち、剣術のみならず、各種武芸にも影響を与えた。同じ新陰流でも尾張徳川家の兵法師範となった柳生兵庫助は、心法論には批判的で素肌剣術の技法を整備しようとした。武蔵の『五輪書』は、実戦的な剣術の心得を核として武士としての生き方を具体的に示している（注4）。

また柔術では、中国拳法の技法や医学の経絡（けいらく）などの影響も受けながら、当身（あてみ）や殺活法を取り入れた楊心流や良移心当流（りょういしんとう）などが生まれた。良移心当流の福野七郎右衛門やその弟子で起倒流乱れを興す茨木専斎は、柳生新陰流を学び、専斎には宗矩の心法論の影響もある。別に柔術の技法を整備した関口流は、紀伊徳川家の流儀となっている。

弓術では、日置流の傍系に竹林（ちくりん）派が成立して、尾張徳川家、紀伊徳川家の両藩に定着し、後の三十三間堂の通し矢における尾張・紀伊の技の競争に発展していく。

江戸初期に、流派武術は武士階級の新たな文化として定着し、以

後江戸時代を通じて、武士が嗜むべきものとして、数多くの流派が展開していくのである。

（2）中期；流派武術の展開と停滞

17世紀後半には、幕藩体制が定着して「天下泰平」の世で耕地面積が大幅に拡大し、農業生産性が高まり、経済的に豊かになった。交通網が整備され、全国の経済圏が出来上がり、上方の町人を中心に元禄文化が花開いた。幕府や諸藩では、組織が整備された分、上下の身分格式が厳密になり、万事は伝統主義となっていった。和歌、俳諧、謡、仕舞、茶の湯、生け花など遊芸文化が展開し、家元を中心とした免許制度も確立する。

武術においては、他流試合が禁じられ、実戦の可能性はほぼなかったので、武術は華法化する傾向があった。武術の技法より、禅や儒教の教えを取り入れて心法を強調する流派が出てくる。流派の中では、免許とする形が多くなり、また新たな流派も増えていった。武士は剣・槍を習うのが務めとは言われていたが、技の稽古が文字通り型通りのものになって、武芸の免許を義理や金で得る者までいた。

こうした中で、弓術では京都の三十三間堂の通し矢が盛んになり、有力な藩の武士が藩の名誉をかけて競い合い、次々と驚異的な記録を打ち立てていった。また勧進相撲では、藩のお抱えになった職業的力士が競っていた。相撲において俵で土俵が作られ、決まり手が整備されたのは、18世紀前後のことであった。また薙刀は、武家の女性の嗜みとしても行なわれるようになった。

（3）後期；流派武術の革新

18世紀後期には、経済発展の中で町人・豪農の社会的な上昇が見られ、封建体制の矛盾が深まり、社会全体が大きく変動しつつあった。18世紀中期から一揆が頻発していたが、18世紀末から外国船が度々

鎖国していた日本に接近し、対外的な危機感も高まった。こうした中で、享保（1716～45）、寛政（1787～93）、天保（1841～43）の幕府の三大改革がなされ、その度に武術の復興が図られた。

剣術では、18世紀初期から竹刀と面・胴・籠手の防具が工夫され、竹刀で打ち合う撃剣が展開していった。最初は流派剣術から反発が大きかったが、実際に打ち合う競技的面白さもあったので、18世紀後半に一刀流中西派なども取り入れてからは急速に広がっていった。

写真３．日夏繁高著『本朝武芸小伝』（享保元年（1716）刊本：国際武道大学蔵）
武芸者 150 人の略伝を掲載する

18世紀末からは諸藩で藩校が多く作られ、儒教の教育とともに剣術・槍術・馬術・弓術・柔術・兵学・砲術など武術の稽古が奨励されていた。

19世紀になると撃剣の試合が盛んになり、武者修行も行われるようになった。中でも千葉周作は、埼玉地方に武者修行をして北辰一刀流の教線を広げ、江戸に町道場を開いたが、竹刀剣術の技術を整理し、教習法を簡素化し、学びやすくして、人気を博した。その他、撃剣の新流派が多く出来、江戸の町道場が盛んになった。撃剣は下級武士を中心として、豪農層や町人も行っている。

18世紀後期から19世紀にかけては、江戸初期からの流派でも中興や復古再編が行われている流派が多い。今日に伝わる尾張柳生家の新陰流剣術の形が改めて整備されたのも、また柔道の「古式の形」

として伝わる起倒流の形が中興・普及したのもこの頃である。起倒流と並んで柔道の母胎となる天神真楊流も19世紀初期に生まれている。

柔術ではそれまで土間で稽古する流派が多かったが、板間やさらには畳を敷いた道場を使う流派も出てきた。また19世紀半ば頃からは、形を崩して自由に技を掛け合う乱捕りも始まっている。

弓術でも、藩校に今日の弓道場とほぼ同じ15間（28メートル）先の垜（あずち）に１尺２寸（36センチ）の的を置き、屋根付きの板間の射場があるものも作られるようになった[注5]。

江戸後期には、今日に直接つながる武道の始まりが見られるのである。

（４）幕末；武術におけるプレ近代

1853年、ペリーの黒船が来航して幕末になると、尊皇攘夷や倒幕運動も起こり、テロが横行する中で、剣術が一層盛んになった。剣術は、豪農層が武士に取り立てられ下級武士が出世する手段でもあった。剣術修行として諸国を巡る者も多く、道場が情報交換の場ともなった。新選組のように実戦の剣を揮った者もいた。

こうした中で幕府は1856年に講武所を作り、幕臣だけでなく諸藩の臣も受け入れ訓練した。講武所は砲術と剣術が中心であった。（柔術も弓術も最初は教授科目に入っていたが、実戦的ではないとしてやがて廃止された。）

講武所の剣術では、各流派の名手が教授方になり、流派を越えて、試合を中心に行われた。竹刀の長さも今の３尺８寸に統一された。幕末には「心気力一致」「気剣体一致」なども言われ、千葉周作の遺稿とされる「剣術68手」には、面、籠手、胴、突きの技が整理されている。剣道の技法もかなりの部分は、この時代に出来上がっており、近代剣道の基盤になるのである。

剣術は、まだ武士階級中心の武術であったが、流派を越えて統一した形で試合が広範に行われていたという点では、すでに近代化が先取りする形で始まっていたのである。

II．近代武道の成立

１．武道の近代化

1868年明治維新となる。西欧の軍事力による圧迫で日本の独立に対する危機意識があったので、新政府主導で社会全体の急激な近代化が上から強制されていた。明治初期の10年間は「文明開化」期で、武士階級が解体され、廃刀令が出て、伝統的なものは時代遅れとされ、江戸時代に展開した流派武術は存亡の危機に直面した。この時期、多くの流派が断絶している。有名剣士でも、職を失い窮迫していたので、「撃剣興行会」として、有名剣士同士や薙刀の女性などが試合を行って、その観戦料を得ることで、わずかに命脈を保つほどであった。

（１）近代剣道・柔道の確立

伝統的な武術を見直す気運が出てきたのは、明治10年（1877）の西南戦争で警視庁の抜刀隊が活躍してからである。警視庁は警察官に撃剣と柔術を訓練することにし、武術大会を催し、優れた剣術家、柔術家を世話係に登用した。

自由民権運動が盛んになる中で、言論弾圧も厳しくなったので、運動会や懇親会の形を取る結社が多くあり、撃剣の試合や壮士養成に剣術訓練をする所もあった[注6]。

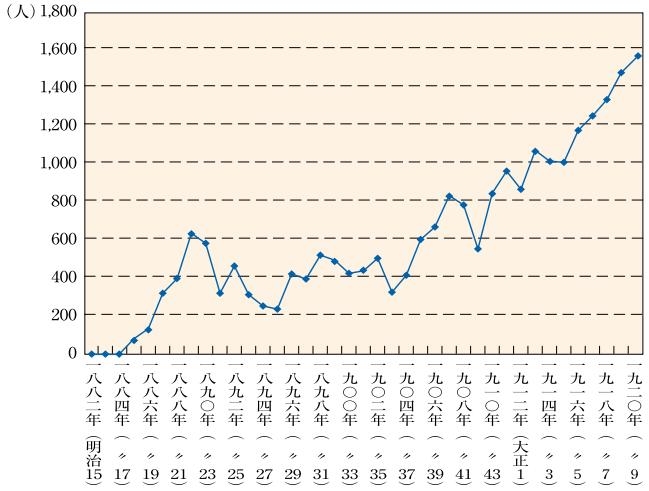
明治15年（1882）、山岡鉄舟（1836～88）は春風館を設立、一刀流を継ぐとともに禅を学んで精神性を強調した剣術指導を始めた。鉄舟は、江戸の無血開城の交渉を成功させた幕臣であったが、維新後は明治天皇の侍従となり社会的に信望の厚い人物であったので、その影響力は大きく、江戸の剣術を近代剣道へと橋渡した人物と言える。

明治15年（1882）は、嘉納治五郎（1860～1938）が講道館を設立した年でもあった。東京帝国大学を卒業し学習院の講師になったばかりの嘉納は、投げ技主体の起倒流と固め技主体の天神真楊流を合わせて、危険な技を省き、「手技・足技・腰技」の分類と「投げ・掛け・払い」などを組み合わせ技を大胆に組み換えた講道館柔道を、以後数年間で作り上げる。柔術が形稽古であったのに対して、柔道は乱取り中心で、試合形式も取り入れて、柔術を近代化したものである。嘉納は、柔道は「体育法」、「勝負法」、「修心法」を合わせ持つと主張した。警視庁の武術大会で、西郷四郎らの活躍で講道館柔道の名が高まった。入門者が増えると、嘉納は「投げの形」「固めの形」を作って教授法を新たにしたが、他方、起倒流の技は「古式の形」として保存している。また修練の励みとするため、段位制も始めている。

明治22年（1889）嘉納が文部大臣らを前に行った講演「柔道一班とその教育上の価値」は、柔術と柔道の相違を明確にし、技的にも理論的にも柔道が確立したことを示すものであった。この明治22年は、大日本帝国憲法が発布された年で、翌年国会が開設され、また教育勅語も出されて明治国家の体制が固まった時代であった。

嘉納による柔道の創始は、伝統武術を近代化し、社会的にも定着させた典型として、他の武道の近代化にも大きな影響を与えることになる。

表1．講道館の入門者数の推移（井上俊『武道の誕生』より）



（2）大日本武徳会と武道の定着

明治27～28年（1894～95）の日清戦争から10年後の日露戦争（1904～05）の時期は、対外戦争とその戦勝によってナショナリズムが非常に高揚した時期であった。新渡戸稲造の『武士道』（1899）が英文で刊行され、欧米では日清戦争、さらに日露戦争にも日本が勝った要因を説明するものとしてベストセラーになったが、日本語に訳され、国内でも武士道がブームになっていた。こうした中で柔道と撃剣は、警察・軍隊・学校・道場で盛んになり、また弓術も学生を中心に展開することになる。

明治28年（1895）、桓武天皇による京都遷都1100年を記念して京都に大日本武徳会が設立された。武徳会は演武会を催し、667人が参加したが、剣術が338人、柔術117人、弓術114人、槍術17人、薙刀14人などであった[注7]。以後、演武会は毎年開催されるように

なった。武徳会は、当初1800人足らずの会員で発足したが、皇族を総裁とし、内務官僚や知事、警察も会員募集に協力させたので、わずか２年後には会員は10万人を越え、10年後には100万人を越えるまでになった。

武徳会は、明治32年（1899）平安神宮内に武徳殿を建て、以後、ここで演武会を開くようになる。武徳殿は、正面に天皇の玉座をあつらえ、復古的な「作られた伝統」という面が強い。さらに明治35年（1902）には「範士･教士」の称号を授与し武術家優遇制度を敷き、同37年には武術教員養成所を建て、翌38年には流派を越えて統一した柔術・剣術の制定形を制定するなど、武徳会は、戦前の武道の推進に大きな役割を果たすことになる。

この間、柔道を創始した嘉納は、明治26年（1894）以来、大正

写真４．大日本武徳会の武徳殿の前で柔術の形の制定委員の写真
（前列中央が嘉納治五郎）〔『写真でみる柔道の歴史』［講談社］より〕

９年（1920）まで３期、通算26年間、東京高等師範学校長の職にあり、武徳会においても柔術部門の責任者であった。さらに明治42年（1909）には国際オリンピック（IOC）委員になり、２年後には大日本体育協会を組織し初代会長となり、翌年の第５回オリンピックに日本が初参加した時の団長となった。嘉納は、柔道だけでなく、剣道、相撲、さらに日本のスポーツの普及・発展に大きな功績を残し、後には沖縄の唐手の本土紹介にも助力している。

近代スポーツの展開を考えると、イギリスのパブリック・スクールでサッカー、ラグビーなどの試合や、陸上競技大会などが始まったのが1860年代、ドイツで体操競技が連盟を組織したのは1880年代、アメリカで、バレーボールとバスケットボールが考案されたのは1890年代、近代オリンピックの第１回大会が開かれたのは1896年である。日本の武道が伝統武術を近代化して社会に定着させ、組織的に展開するのが1890年代という早い時期であったことは、世界の体育・スポーツ史上でも特筆に価することである。

（３）学校教育での展開と「武道」

日露戦争後の明治末期から大正時代、日本は「一等国」の仲間入りをし、朝鮮併合（1910）を強行し、中国への進出も図って、帝国主義の道を歩むことになる。第一次世界大戦（1914～18）中には、戦場となった欧州向けの輸出が大幅に伸び、大戦景気になり、アジアにも勢力を広げていった。江戸時代に生まれ武士であった世代がほぼ亡くなったが、「武士道」がブームとなり、軍国主義的な傾向も強まっていった。この時代に、大学・高等学校・高等専門学校の学生を中心に競技としての武道が展開する。

武道を学校の科目として教育することは、武道関係者の長年の悲願であった。明治16年（1883）文部省が撃剣・柔術を科目として

採用することの可否を諮問したが、調査を行った体操伝習所は翌年に否と結論を出した。この後、何度も請願運動があり、明治29年（1896）には帝国議会に柔・剣術を中学校の正課に加えることが建議されたが、否決された。中学校での正科として柔道・撃剣を教えてもよいことになったのは、明治44年（1911）であった。

学校の教科となると、教員の養成が必要であり、教授するのに形の統一と集団教授法の開発が早急に必要となった。教員養成は、東京高等師範学校と明治45年に京都の武徳会に出来た武術専門学校が中心に行った。形の統一は、柔術に関しては、講道館が大きな力を持っていたので、明治39年（1906）の武徳会の制定形（投げ技十五本、固め技十五本）で異論は出なかったが、剣術は伝統ある流派が多く、同年の武徳会の制定形３本には異論が多かったので、改めて20人の委員を委嘱して再調査を行い、大正元年（1911）に大日本帝国剣道形（太刀の形七本、小太刀の形三本）を制定した。（これは現在、日本剣道形として受け継がれている。）大正４年には集団指導法を書いた高野佐三郎著『剣道』も出版された。集団訓練の中で礼法もこの時期に整えられている。

またこの時期から、江戸時代には流派の秘伝とされていた剣術の伝書が公開され始めた。明治42年（1909）には『五輪書』が公刊され、高野の『剣道』にも掲載されている。大正４年（1915）には江戸期の剣術書21編を載せた『武術叢書』が出され、さらに大正10年には山田次朗吉が『剣道集義』正続で剣術書58編を翻刻している。大正14年には山田著『日本剣道史』、下川潮著『剣道の発達』という通史も出版された。

「柔道」という名称は、講道館柔道が広まるにつれ明治30年代にはかなり知られるようになっていた。生け花や茶の湯が近代化をはかり、新たに意味づけられて「華道」や「茶道」を名乗り始めるのは1890年代である。撃剣に代わって「剣道」の名称が定着してくるのは、1910年代である。そうした流れの中で、大正８年（1919）、武術専門学校の校長であった西久保弘道は、それまでの「柔術・撃剣・弓術」を、「柔道・剣道・弓道」に改め、武術専門学校を武道専門学校に改名することに力を尽くした。文部省の用語として「撃剣」が「剣道」に代えられたのは、大正15年（1926）のことであった。

（４）学校武道の拡大―弓道・薙刀

柔道・剣道以外に学校教育で実施されたのは、弓道と薙刀であった。

弓術は、明治維新以後、衰退が著しく、盛り場の遊戯ともなっていた。明治22年（1889）、竹林派で幕臣だった本多利実は「弓道保存教授」を著し練習所を開いた。本多は、明治25年から第一高等学校の師範になり、28年から武徳会にも参加したが、本多が工夫した正面打ち起しの射法は、明治末期から大正期に広まった。明治末期から大学間で競う弓道大会が行われ、大正13年（1924）から各種武道・スポーツの全国大会として始まった明治神宮大会にも弓道が採用されたので、一層盛んになった。昭和４年（1929）に高等学校の教材に弓道が採用された。昭和7年には武徳会で射礼を小笠原流で統一し、射法は「弓道要則」を発表した。昭和11年（1936）には中学校でも弓道が正課採用となった。

薙刀は、江戸時代から武家の婦女子の武芸としても展開していたが、日清戦争前後から婦徳涵養と女子体育の立場から再認識されるようになり、一刀流の小沢卯之助は明治29年（1896）から集団で行う「武術体操法」を工夫していたが、明治41年（1908）「改正薙刀体操法」を出版、本格的な普及を図った。大正２年（1913）「学校体操教授要目」に課外に行う運動として「薙刀（女子）」が示されてからは、

天道流の美田村千代、直心影流の園部秀雄ら女性指導者の下、女子師範学校や高等女学校などで薙刀が行われるようになった。昭和９年（1934）京都の大日本武徳会に、２年後には東京の修徳館に薙刀専修の教員養成所が設けられ、昭和11年（1936）に女子師範学校・高等女学校で、弓道とともに薙刀の正課採用が認められてから急速に普及した。昭和15年（1940）武徳会は「薙刀道基本動作」を決め、翌16年から女子中等学校ならびに国民学校体錬科で必修科目として実施されるようになる 。

２．近代武道の展開

（１）競技会の隆盛

大正末から昭和初期にかけては、外来スポーツが各種導入され、学生を中心として大会や対抗試合が盛んになった。大正13年(1924)明治神宮大会で、各種のスポーツの全国規模の試合が行われた。陸上競技、水泳、野球、フットボール、バスケットボール、バレーボールに加えて、柔道・剣道・弓道・相撲の試合が行われた。武徳会は、「武道は勝負を争うことを本旨としない」として不参加を表明した。以後、毎年大会が開催され、競技が盛んになるに従って、武道のルールが他のスポーツと比較され、スポーツ的な試合方法（対抗戦、リーグ戦、トーナメント法、三審制等）が工夫されるようになった。

昭和４年（1929）の昭和天皇の即位を記念した天覧武道大会は、台湾・朝鮮も含む全国規模で、高段で有名な剣士・柔道家が参加する空前の大会となった。審判員を３名にするなど、試合ルールが明確化された。天覧武道大会は、この後昭和９年の皇太子誕生記念と同15年の皇紀2600年奉祝の大会が開かれている。

この時期、武道の競技化・スポーツ化が非常に進んだと言えるが、逆にスポーツの日本化も進んでいる。特に野球は、朝日新聞に野球評論の健筆を揮った飛田穂州などが精神主義化を進めている。大正４年（1915）に始まった全国中学野球大会は、13年から甲子園球場に舞台を移し、昭和２年（1927）からはラジオで実況放送されて、大人気となった。

この頃、競技化する武道に対して危機感を抱き、精神性をより強調する流れもあった。

柔道では、嘉納自身が、試合で勝利至上主義に向かう柔道を強く憂いて、身体鍛練で技を争うのは「下の柔道」で、精神修養を含むのが「中の柔道」、さらに身心の力を最も有効に使って世を補益するのが「上の柔道」と論じた。大正11年（1922)、「精力善用・自他共栄」を柔道原理として制定している。

剣道では、一ツ橋商業高校の師範であった山田次朗吉は、武徳会に入らず、試合にも批判的で、直心影流の「法定」の形を教え、修心としての剣道を強調していた。

弓道では梅路見鸞（けんらん）が「弓禅一如」を唱え、阿波研造は「大射道教」の組織を作って独自の指導を行った。阿波の指導を受けたドイツ人のオイゲン・ヘリゲルが後に『弓と禅』(1948) を著すことになる[注８]。

（２）武道の拡大―相撲・空手道

これら武道の発展に刺激され、今までになかった種目が武道に加わるようになる。

相撲は、元来は農耕儀礼や神事と結びついており起源は古い。平安時代の「相撲節会」、鎌倉時代の「武家相撲」、さらに江戸時代の「勧進相撲」などは、いずれも職業的力士が行っていた。農村では宮相撲も行われていたが、流派は作られなかった。丸い土俵ができ、決

まり手が整備されたのは18世紀頃で、18世紀末には谷風など名力士が出、上覧相撲を契機に相撲故実も復活・整備された。明治になって東京会所が設立され職業相撲が公認されたが、力士は髷を結い、行司は烏帽子・直垂姿で伝統性を強調し、度々天覧に浴し、日清戦争後から名力士も出て人気を博し、明治42年（1909）に相撲常設館を「国技館」と呼ぶようになってから、相撲は「国技」と言われるようになった。

こうした職業相撲の隆盛に伴って、嘉納の提唱もあって、明治33年（1900）から体育として課外活動で学生相撲が展開した。明治末期には学生相撲は非常に盛んになった。明治45年（1912）初の学生相撲大会を開催して以来拡大し、大正８年（1919）全国中等学校相撲大会が開催され、大正13年（1924）からの明治神宮競技大会に相撲が取り入れられ、県代表の対抗戦で、競技としての相撲が浸透していった。昭和８年（1933）には全日本学生相撲連盟が組織され、大学、中学、小学校に至るまで相撲部が設けられるようになり、中学校全国大会は、甲子園の中学野球（現在の高校野球の前身）と並んで、全国的な熱狂を呼んだ。ただ戦前には、相撲が学校教育の正課となることはなかった。

また大正末から昭和初期にかけて、琉球王国で発達していた唐手が日本本土に紹介され、日本の武道の影響を受けて改編され、空手道として武徳会に登録されるようになる。

琉球唐手術は、14世紀にまで遡る歴史があり、中国拳法との関係も深く、琉球王国の禁武政策の中で武器を持たない徒手格闘技として民間で秘密裏に修練されていたと言われる。那覇手、首里手、泊手の３系統があったが、明治になり近代化され、沖縄では教育の中に取り入れられていたが、大正11年（1922）に船越義珍が日本本

土に紹介して以降、大学生を中心に急速に広がった。日本の柔術・柔道の形の影響も受け、組手が作られ、教習法や、また競技化した自由組手が工夫された。昭和４年（1929）には、「唐手」に代え「空手」の語を使用するようになった。元来源流が3系統あったが、日本柔術を取り入れて工夫をした派もあったので、それぞれに異なった形を持ち、別の流派として展開した。1930年代後半には、松濤館（船越義珍）、和道流（大塚博紀）、糸東流（摩文仁賢和）、剛柔流（宮城長順）の四大流派が、武徳会に登録されている。

写真５. 空手を指導する船越義珍（1920年代初期）（船越『空手道一路』［産業経済社］より）

（３）戦時下の武道―銃剣道と戦技化

昭和６年（1931）に満州事変が起き、同12年の日華事変以降は日中戦争が続き、16年からはアジア太平洋戦争に突入することになる。昭和13年には「国家総動員法」が公布され、戦時統制が強まっていった。昭和16年「国民学校令」が公布され、体操科は体錬科になり、武道が必修になった。昭和17年には大日本武徳会も政府の外郭団体になり、銃剣道、射撃道も加えて戦時色を強めた。

銃剣道は、陸軍戸山学校で明治27年（1887）にフランス式の銃剣と日本の槍術を合わせて作られ、軍隊の中で展開していたが、大正14年（1935）から武徳会に登録され、昭和16年（1941）に銃剣道振興会を設立していた。

またこの時代、吉川英治の『小説宮本武蔵』（1935～39）が新聞

に連載され、また講道館の西郷四郎をモデルとした冨田常次郎の『姿三四郎』（1942）も刊行され、それぞれ映画化されて、精神主義的な武道観を形成するのに影響があった[注9]。これらの作品は、戦中から戦後の武道の復興から普及期に影響を及ぼすことになる。

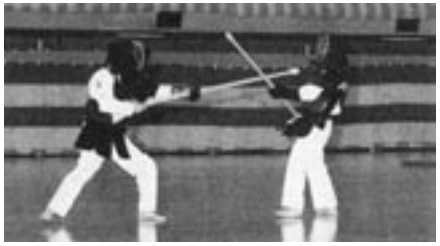


写真６．銃剣道の技（戦後は戦技の要素は払拭しスポーツとしての競技となる〔『日本武道館三十年』より〕）

Ⅲ．現代武道の展開

１．武道の現代化

昭和20年（1945）の敗戦で、武道は戦時下に軍国主義に傾いていたため、占領軍から危険視されて全面禁止になった。大日本武徳会は解散され、学校教育でも社会体育としても禁止された。そのため武道は、以降スポーツ化を進めることで存続を図ることになる。

（１）武道禁止からの復活

相撲と空手道は昭和21年（1946）にいち早く解禁され、柔道も外国人愛好家が多く、講道館の稽古は通常通り行われていた。

アマチュア相撲の日本相撲連盟は、昭和21年に設立され、日本体育協会に加盟し、この年から始まる国民体育大会でも相撲競技が始まっている。

柔道は、昭和24年（1949）に全日本柔道連盟が設立され、学校教育で柔道が解禁になったのは、昭和25年（1950）であった。

弓道も禁止は厳しくはなく、昭和22年に連盟が結成され、24年に改組し、25年に日本体育協会に加盟し、国民体育大会にも参加、昭和26年に学校教育においても解禁になった。

けれども剣道に対しては占領軍の態度は厳しく、公私の組織的活動が禁止され、「剣道」「武道」の名称も使用禁止とされた。そこで剣道をスポーツ化した「しない競技」が考案された。稽古着・袴ではなく、シャツとズボンとし、試合も時間制でポイント制として、スポーツ化を印象づけ、昭和27年にようやくしない競技として学校教育でも許可を得た。しかし昭和27年（1952）にサンフランシスコ平和条約が発効して日本が独立を回復するや、本来の剣道復活の気運が高まり、全日本剣道連盟が結成された。翌年には「体育・スポーツとしての剣道」を掲げ、社会体育、次いで学校教育でも復活し、昭和29年にはしない競技連盟も合体して今日につながるのである。

薙刀は、戦前に女子教育で展開していたが、天道流と直心影流の流派の調整が難しく、戦後は競技の面を中心として「なぎなた」として展開した。昭和30年（1955）に全日本なぎなた連盟が発足、同34年から中学校以上のクラブ活動で認められた。同41年には高校の正課として認められる。

銃剣道も、昭和31年に全日本銃剣道連盟を結成し、戦前の戦技の要素を払拭して「武道として国民スポーツとして」の普及を図っている。

昭和33年（1958）には、中学校の運動領域の一つに「格技」を設け、「すもう」、「柔道」、「剣道」を挙げ、いずれか一種目を男子に指導するとされた。2年後には高校にも同様の措置が取られた。

（２）戦後に展開した武道―合気道・少林寺拳法・居合道・杖道

合気道は、すでに大正末期から植芝盛平（1883～1969）が、大

東流合気柔術を母胎とし、神道思想の影響を受けつつ「合気とは愛なり」などを掲げて、大正11年（1932）に「合気武術」を称して、独自の形態を取るようになり、昭和17年（1942）には武徳会にも登録されたが、まだ一般には公開していなかった。戦後の昭和22年に財団法人合気会が発足、昭和30年（1955）から一般公開演武を行って以降、急速に広まっていった。合気道は、競技として競うことを否定し、専ら形による指導をしている[注10]。

少林寺拳法は、中国に特務員として派遣され中国拳法の伝授を受けた宗道臣（1911～80）が、戦後昭和21年に帰国した後、暴力が横行し道義が廃れた社会を見て、中国拳法に創意工夫を加えた技を教えながら人としての道を説き、「拳禅一如」「自他共楽」を掲げて創始したものである。昭和26年宗教法人として出発し、四国を中心に関西圏から展開した。昭和32年（1957）、武道団体として全日本少林寺拳法連盟が設立された。

昭和31年（1956）には、日本剣道連盟に居合道と杖道も入ることになった。昭和41年に、居合道は制定形七本を、同43年には杖道の十二本の制定形を決めている[注11]。

写真７．合気道の指導をする晩年の植芝盛平〔『植芝盛平伝』［出版芸術社］より〕

写真８．少林寺拳法の剛法の指導をする宗道臣〔『日本の武道』［日本武道館］より〕

２．現代武道の発展

日本の社会は1950年代後半には戦後復興を終え、1960年代の10年間は、産業も農業から工業中心へと大きく転換し、農村から都会へと大量の人々が流れ、社会の様相も大きく変貌した。年に10％以上の高度経済成長を遂げ、所得もほぼ倍増して生活が豊かになり、余暇を楽しむ余裕も増えた。国民体育大会（国体）は、昭和21年以来日本体育協会主催で開かれていたが、昭和36年（1961）のスポーツ振興法によって、文部省も共催し、各都道府県で順に開催されるようになり盛んになった。こうした時代の中で、戦後の武道も発展していった。昭和39年の東京オリンピック大会は、日本のスポーツ界のみならず、武道界にとっても時代を画する事件となった。

（１）東京オリンピック大会

昭和39年（1964）の東京オリンピック大会では、柔道が正式種目になり、その会場として日本武道館が建設された[注12]。柔道は、階級制で試合が行われ、軽量級・中量級・重量級で日本人選手が優勝したが、最後の無差別級ではオランダのヘーシンク選手が優勝したことは、日本社会に大きなショックを与えたが、柔道が世界に広まる大きな刺激となった。またこの時、剣道、弓道、相撲がデモンストレーションを行い、それぞれに国際化へのステップとなった。また流派で異なり対立していた空手道も、この年大同して全日本空手道連盟を結成した。

東京オリンピック後、全国的にスポーツ熱が高まった。昭和43年（1968）は明治百年であり、経済成長により自信を取り戻した日本ではナショナリズムも高まりもあって、武道は、少年や女性にも広がって非常に盛んになった。

（2）日本武道館を中心とする武道の展開

日本武道館は、武道の統一団体としての活動を始め、現代の武道の展開に大きな役割を果たすことになる。昭和41年（1966）武道の指導者養成を主な目的として武道学園を開校、同43年武道団体の広報活動として雑誌『武道』を刊行、昭和46年千葉県勝浦市に日本武道館研修センターを建設するなどの直接関係した事業や施設の他に、後述する日本武道学会、日本武道協議会、日本古武道協会、全国都道府県武道館協議会、国際武道大学などの団体が生まれる母胎となった。

昭和40年（1965）から43年にかけて、日本体育大学、東京教育大学、中京大学、東海大学の体育学部に武道学科が次々と誕生した。昭和41年には、江戸時代の流派武術の伝書を集めた『日本武道全集』（全７巻）が刊行されている。昭和43年（1968）には、日本武道学会が設立され、武道の学術的な研究が行われるようになった。

昭和45年には、学校体育の「格技系の種目」の中で、これまでの「すもう」、「柔道」、「剣道」に加え、「弓道」、「なぎなた」も教えてもよいとされた。

武道が盛んになる一方で、競技化・スポーツ化が進んでいたので、それを憂えて、剣道連盟は、現代に即した理念の確立を目指して昭和50年（1975）に「剣道は、剣の理法の修練による人間形成の道である」とする「剣道の理念」を制定した。

日本武道館〔『日本の武道』［日本武道館］より〕

昭和52年（1977）、柔道・剣道・弓道・相撲・空手道・合気道・少林寺拳法・なぎなた・銃剣道の９種目の連盟と日本武道館の10団体で構成された日本武道協議会が発足した。

昭和53年（1978）には日本武道館の主催で古武道大会が開かれた。46流派が出場して大盛況で、翌年には、日本古武道振興会が設立された。これ以後、この会主催で古武道大会は毎年開催されている。

また昭和40年代終わり頃から全国各地に県立や市町村立の公立武道館が数多く建設されるようになっていたが、昭和54年、646の県立、市町村立武道館が集まり、全国公立武道館協議会を設立したが、２年後、武道館は33都道府県に出来、市町村立は1000を越えたので改組して、全国都道府県立武道館協議会が発足した。

３．武道の国際化

1980年代は、日本の GNP が世界第二位となり、日本企業の海外進出も盛んで、輸出も順調で、“JAPAN AS No.1”（エズラ・ヴォーゲル：1979）というベストセラーまで出て、日本の国際化が進んだ時期であった。『五輪書』の英訳（1974）が、ビジネス書としても売られ、10万部を越えるベストセラーになった（現在では、英訳７種類、100万部を越える）。こうした中で武道の国際化が急速に進められた。

（1）武道の国際連盟

各武道により国際化の事情はかなり異なる。武道の国際組織は、表２の通りである。

柔道は、創始者・嘉納治五郎自身が何度も海外渡航をした国際人であり、戦前から積極的に国際化を図っていた。第二次世界大戦

後、日本では武道禁止時代の1948年に英・仏・伊・蘭の４カ国が集まりヨーロッパ柔道連盟を設立し、それに７カ国が加わる形で1951年に世界柔道連盟（IJF）が成立した。日本は翌1952年に加盟するとともに、２代目会長に講道館の嘉納履正がなった。けれども1965年以降の３代目会長にはイギリスのパーマーがなり、オリンピック種目に採用されたので競技化の傾向を強めて、世界５大陸にわたる組織となった。1979年に４代目会長に松前重義がなったが、1987年以降、現在の８代目まで外国人会長である。

剣道および空手道で、国際連盟が作られたのは1970年である。1974年に少林寺拳法世界連合、1976年に国際合気道連盟が成立している。70年代後半から、武道の国際化が本格化したと言える。その後の国際化の進展の中で、なぎなたは1990年に、相撲は1992年に、弓道は2006年に、それぞれの国際連盟が成立している。

表２．武道の国際組織一覧

国際組織の名称	結成年度	発足時の加盟国数	2006年現在の加盟国数
国際柔道連盟	1951	11ヶ国	199ヶ国地域
国際剣道連盟	1970	17ヶ国地域	47ヶ国地域
世界空手道連合	1970	33ヶ国	173ヶ国地域
少林寺拳法世界連合	1974	15ヶ国	31ヶ国
国際合気道連盟	1976	29ヶ国	42ヶ国地域
国際なぎなた連盟	1990	７ヶ国	13ヶ国
国際相撲連盟	1992	25ヶ国	77ヶ国地域
国際弓道連盟	2006	17ヶ国	17ヶ国

各武道の歴史と特性により、国際的な広がりも、また国際化に関する取り組みもさまざまである。

柔道は最も国際化し、国連加盟国より多い190カ国を越え、オリンピック種目であるので、競技化と商業化も進んだが、それとともに武道としての特性が失われたとする声もある。今や柔道というより、JUDO の時代であるとも言われている。

剣道は、オリンピック種目に入ると独特のよさが失われるとして否定的であるが、空手道や相撲のようにはっきりとオリンピック種目入りを目指しているものもある。設立時の参加国数と現在（2006年現在）の参加国数は表２の通りである。

1978年には訪欧武道団が、ドイツ・フランス・オーストリアを訪問、演武と指導を行った。以後、それぞれの連盟で指導者を派遣している。流派の伝統を残す古武道の演武会も1982年にパリで行われた。

（２）国際武道大学

武道大学の構想が初めて示されたのは、昭和54年（1979）の日本武道館の常務理事会であった。昭和50年以来日本武道館の会長であった松前重義は、53年の訪欧武道団長で、国際柔道連盟会長にも立候補していたが、各国指導者と会う中で国際的にも通用する武道の指導者を養成する大学の構想を口にしたと言われる。55年（1980）には日本武道館の常任理事会で国際武道大学の設立を決議し、翌年、「武道学の確立」と「国際的人材の養成」（設立趣意書）を掲げて設立準備財団が発足した。財界と地元・千葉県と勝浦市からの多額の寄附を得て、昭和59年（1984）、国際武道大学が千葉県勝浦市に開学した[注13]。

昭和61年（1986）には、国際武道大学の隣接地に日本武道館の武道科学研究センターがオープンした。これは、人文系と自然科学系の武道学の確立に向けて、国際武道大学の教員を中心としながら、全国の武道の研究者が利用できる施設たるように、当時の最先端の機器を揃えたものであった。（このセンターは、平成７年（1995）に国際武道大学に移管・委譲され、武道・スポーツ科学研究所となり、現在に至る。）

昭和62年（1987）には日本武道協議会が『武道憲章』を発表した。武道は、「技を磨き、身体を鍛え、心胆を錬る修業道・鍛錬法として洗練され発展し」「日本人の人格形成」に寄与したものであるが、「いまや世界各国に普及し、国際的にも強い関心が寄せられている」ことを自覚し、「単なる技術の修練や勝敗のみにおぼれず、武道の真髄から逸脱することがないよう自省するとともに、このような日本の伝統文化を維持・発展させるように努力しなければならない」とし、「目的・稽古・試合・道場・指導・普及」の六か条にわたって「基本的な指針」を掲げたものである。

昭和63年（1988）からは、在日の外国人武道家を対象として日本武道館主催の国際武道文化セミナーが毎年、開催されるようになった。

この1988年に開かれたソウルオリンピックで、女子柔道が公開競技となり、4年後から正式にオリンピック種目となる。

翌1989年は昭和が平成に改まった年であるが、この平成元年には、戦後の学校体育の中で昭和33年（1958）以来の「格技」という名称が、「武道」という本来の名称になった。

こうして1980年代の武道は展開していたが、武道人口は、1985年をピークとして下降線を辿るようになり、少子化の影響もあって、その傾向は現在も続いている。

4．21世紀の武道―武道の将来

21世紀を迎えると、武道の状況も大きく変わってきている。

戦前の武道を知る世代がほとんどいなくなり、戦後復活して以後に武道を始めた世代になり、雰囲気がかなり変わってきた。古武道も継承者の代替わりが進んだ。国際化はさらに進展し、外国人武道家は決して珍しくはなくなり、古武道の宗家を継ぐ者も出始めている。また各種目で各国の武道連盟からそれぞれ段位を発行するのが普通になっている。2001年には、英語の武道専門誌 “Kendo World” も創刊された。インターネットの普及により、世界中の情報が容易に手に入るようになり、また発信できるようになっている。2003年には武道研究の国際シンポジウムも開かれた[注14]。

2000年のシドニーオリンピック大会では、篠原・ドイエ戦の判定をめぐり全日本柔道連盟が国際柔道連盟へ抗議文を送付したが、武道の審判のあり方が今後緊要な問題になると思われる。

2006年には、日本の伝統的な要素が非常に強くある弓道にも国際連盟が発足したが、この年の世界剣道選手権の団体戦で日本が準決勝で敗れ、2007年には国際柔道連盟の理事選挙に敗れ、正式理事に日本人が一人もいなくなるなど、いよいよ日本の固有の武道ではなくなり、世界の武道へと移り行く先を示している。

平成18年（2006）には教育基本法が改正され、「日本の伝統文化の尊重」が謳われ、それにともなって学習指導要領も改訂され、平成24年から中学校で「武道の必修化」が実施されることになっている。

おわりに

武道には伝統文化の面と近代化の両面がある。そのどちらの面を強調するかで武道のあり様も捉え方も大きく変わる。伝統文化を基盤とする部分も多いが、伝統と言われる内容でも近代に作られたものも多く、時代により武道はかなり変化してきている。明治から大正、昭和と進むにつれ、基本的には近代スポーツ化を進めていたが、戦後、禁止から復活する中で、また国際化する中で変遷してきたし、

現代社会の中でさらに大きく変容しようとしている。

武道は今日、外国人の修行者も非常に多くなっている。武道発祥の地の日本で本物の武道を学びたいと来日したら、日本では武道が競技化しているのに、がっかりする人も多い。外国人の方が、古流の武芸を習い、武道の歴史を熱心に調べ、日本人武道家が武道の歴史に無関心でいるという事態も見受けられる。

現代では生活様式がすっかり西洋化し、日常的に和服を着たり、畳で座ることを中心にした生活もなくなった。また昔は遊びの中で行っていた相撲なども行われなくなり、体力低下も懸念される。伝統的な生活の中にあった腰を入れ腹を据えたからだ遣いも大幅に薄れている。

今後、武道がどのように展開していくか、我々が伝統をどう受け継ぐかによると思われる。今日の武道が形成されるまでには、非常に多くの先人たちの努力があったことにも思いを致し、また武道は日本の伝統文化の中でも今日なお国際的に通用する文化であることを自覚して、武道を専門とする大学で学ぶ誇りも持って、どのように受け継ぎ、いかに展開させていくべきか、よく考え、日々努力していかれることを切に期待する。

《本文注》

（注１）石岡久夫「弓道史」（『日本武道大系』第 10 巻）　116 ～ 125 頁参照。

（注２）「蟇目」は、大きな音を響かせる鏑矢（かぶらや）を射て邪を除く神事で、安産祈願を中心に儀式の時に行われた。「射礼」は、朝廷で正月に親王以下五位以上、六衛府の官人などが行う競射を観覧する行事。「相撲節会」は、元来神占いの相撲から発展して、朝廷において国々から相撲人（すまいびと）を召し集め、７月に相撲をとらせ天皇がご覧になる年中行事となっていた。

（注３）今村嘉雄「武道史概説」（『日本武道大系』第 10 巻）　13 ～ 15 頁参照。

（注４）『五輪書』の内容およびこの時代の剣術の展開については、拙著『定本五輪書』（新人物往来社）参照。

（注５）中村民雄『今、なぜ武道か』204 ～ 5 頁参照。

（注６）湯浅晃「自由民権運動と剣道」〔『剣道の歴史』（全日本剣道連盟）〕166 ～ 171 頁参照。

（注７）中村民雄『剣道事典』（島津書房）190 頁参照。

（注８）拙稿「弓の道―オイゲン・ヘリゲルと師阿波研造」（『国際武道大学研究紀要』第 5 号所収）参照。

（注９）井上俊『武道の誕生』155 ～ 164 頁参照。

（注 10）講道館柔道出身の富木謙治は、乱取り法が必要として競技化した日本合気道協会を組織している。

（注 11）居合道の制定形は、その後、昭和 55 年（1980）に三本、平成 12 年（2000）にさらに二本追加されている。

（注 12）東京オリンピック大会は、嘉納治五郎がその誘致に生涯の最後の情熱を傾け、昭和 15 年（1940）に開かれる予定であったが、戦争のために返上した経緯があった。

（注 13）国際武道大学の建設には、日本武道館から設立財団の基金 1 億円の支出の他、財界から 17 億 5 千万円の募金、千葉県から 10 億円の補助金、勝浦市から 3 万坪の土地の無償提供があった。『日本武道館三十年』（日本武道館）139 ～ 145 頁参照。また教学組織の確立には、元・文部省体育局長・前田充明らが尽力した。『国際武道大学 10 周年記念誌』参照。

（注 14）国際シンポジウムは、京都の国際日本文化研究センターで 11 月 18 日から 22 日まで、世界各国の武道研究者 49 名が集まり、発表と討議、さらに一般向けの講演会も開かれた。その記録が、次に挙げる文献 9 である。

■武道についての主な文献

1.『日本武道大系』（全 10 巻）　今村嘉雄ら編　同朋舎出版　1982
江戸時代の流派の伝書類がまとめて翻刻されている。剣術 3 巻、弓術 1 巻、柔術 1 巻、薙刀・槍術・棒術他 1 巻、砲術・水術・忍術・馬術 1 巻、空手道・合気道・少林寺拳法他 1 巻、武芸随筆 1 巻、武道の歴史 1 巻。

1.『武術叢書』　吉丸一昌編　原版；1915、復刻版；名著刊行会　1978
武芸者 150 人の伝記を載せた『本朝武芸小伝』（1716）を巻頭に、流派武術の系統図、沢庵『不動智』、宮本武蔵『五輪書』から千葉周作門下の伝書まで、江戸時代の重要な 21 点の原典を翻刻している。

2.『武道の名著』渡辺一郎編　東京コピイ出版部　1979
江戸中期から後期の特色ある剣術・柔術・弓術・馬術・槍術・兵学の伝書20編について、解説とともに原典とその註解をつけている。
3.『図説　日本武道辞典』笹間良彦　柏書房　初版；1982、普及版；2003
歴史的な起こりから現代武道まで武道に関して網羅的に項目を立て、図解を多く載せて解説した大冊の辞典。
4.『増補　武芸流派大事典』綿谷雪・山田忠史編　東京コピイ出版部　1982
武術の流派について、網羅的に挙げて説明している大冊の事典。主な武芸者については簡単な伝記も載せる。
6.『日本史小百科　武道』二木・入江・加藤編　東京書籍　1994
1.武道のおこり、2.武道の発達（江戸時代の流派武術）、3.広まる武道（近代から現代の武道の展開）、4.現代に生きる武道文化（稽古・礼・構えなど）コンパクトにまとめている。
7.『武道の誕生』井上俊　吉川弘文館　2004
講道館柔道の成立と発展、海外の普及、また大正後期から昭和前期の武道とスポーツの関係、スポーツの武道化などについて、社会学の観点から論じる。
8.『今、なぜ武道か』中村民雄　日本武道館　2007
江戸時代から近代までの武道の身体技法・施設・道具・制度・技の体系についての詳しい武道史を踏まえながら、現代の武道のあり様についての数々の問題提起をしている。
9.『日本の教育に武道を』山田奨治・A/ ベネット編　明治図書　2004
2001年に国際日本文化研究センターで行われた武道の国際シンポジウムの論文集。武道の理念、概念、教育、国際環境、公開講演の5部構成で、23人の論稿と討議のまとめ、講演原稿が掲載されている。（英語版は“Budo Perspectives” Kendo World Press NewZealand 2003）。
10.『日本の武道』日本武道館編　2007
日本武道館による日本武道協議会設立30周年記念企画。武道の歴史と古武道について論じた後、現代の武道の柔道・剣道・弓道・相撲・空手道・合気道・少林寺拳法・なぎなた・銃剣道の各連盟が、それぞれの歴史や組織・理念・すすめ・指導・当面する課題・将来展望を書いている。また組織・研究機関の概要、資料編には武道近代140年の歴史など掲載されている。